

02—新「コビアンキ」:ミラノ観光情報案内所

ミラノ県の運営する「ミラノ観光情報案内所」は、2007年にそれまでのアレンザリオ宮左ウイングから、コビアンキ・ビル¹の地下に移転しました。移転先はミラノの最初の「コビアンキ・パブリック・バス・ハウス」のあった建物で、もともと特色となっていたリバティとデコの建築様式をそのまま大切に維持しつつ、新しい情報案内所にマッチするように改造されました。ドウオーモ広場の柱廊の下にある中央エントランスは特にその様式の典型として知られています。

この「コビアンキ」は、ポーロニヤの実業家で天才的な直感の持ち主であったクレオパトロ・コビアンキが1924年に建設したものであり、バス、シャワー、マニキュア、調髪、アイロン室などのパーソナルケアや身だしなみに役立つサービス、さらには列車や劇場のチケット販売所、電話設備、音楽室、読書室などを一つの建物に集めたものでした。このアイデアは劇的な大成功を収め、コビアンキは、またたく間に旅行者だけでなく、ミラノの住民たちも多く集まる拠り所となったのです。そして1920年代から30年代にかけて、実業家コビアンキはさらにイタリア主要都市すべてに同様の施設、「パブリック・バス・ハウス」をオープンさせました。

ミラノの「コビアンキ」はとりわけ、内部のインテリアや仕上げのゴージャスさが特徴となっており、2003年にこの建物の大改造事業を委嘱されたベネヴォロ建築設計事務所もこのゴージャスさを再現するために力を尽くしました。したがって、きらびやかな大理石や寄せ木細工の木材などについてはオリジナル素材の再利用や修復が可能な限り実施されました。一方それがかなわないものについては吊天井の多色タイルの場合のようにオリジナルと同様のタイルを複製するという工程をふみました。この修復工事の間に帝政ローマ時代および後期帝政ローマ時代に遡るとされる遺跡が発見されました。この遺跡はトッマーソ・グロッシ通り側入口から入ってすぐ近くの広い展示スペースで見ることができます。遺跡の中心は井戸と半円形の迫力のある壁の一部ですが、この壁は大きな部屋の周囲を形作っていたものとされています。

今日でも、かつての「パブリック・バス・ハウス」の時代と同じように、コビアンキには毎日、大勢の市民や旅行者が訪れています。ミラノ観光情報案内所の内部では、実際、カルチャーイベント、スポーツ競技、コンサート、美術展、見本市、食文化やワイン関連催しなど、ミラノ市および周辺テリトリーに関するあらゆる情報を入手できます。用意されている情報マテリアルのハイライトはミラノ県観光課の編集する「Milano Mese」という月間誌で毎月開催されるイベントすべてがイタリア語に加え英語の完全訳で掲載されています。

なお、建築家シモーネ・ミケリが最近行ったリスタイリング工事により、リバティ様式の情報カウンター²の脇に、新しいスペースがオープンしました。

これは2008年のミラノ国際家具サローネの際に、コビアンキを出会いの場所とするため、イタリア主要企業の貢献によって実現されたインスタレーションであり、ミラノ市に寄贈されたものです。この新しいスペースは「アーバン・サロン」と名付けられ、世界レベルでミラノが中心的役割を果たしているデザイン、ファッション、カルチャーなどのテーマについて、コミュニケーションやアイデア・情報の交換を行うことのできる場所となっています。

コビアンキは、2015年にミラノで開催される国際万博に向けて、400万人のミラノの人々、そして毎年ミラノを訪れる約1千万人の旅行者の方々にとってこれまで以上の拠り所となるよう、内容を充実させ、発展していきます。